

# 「大工と鬼六」の出自をめぐつて

櫻井美紀

日本口承文藝學會第十一回研究例会（一九八六年十二月）で、私は表記のタイトルで研究発表を行つた。これは同学會第十回研究例会での高橋宣勝氏の「『大工と鬼六』は日本の民話か」と題する研究発表を受けて行つたものであつた。この数年前から、私は「大工と鬼六」の出自の解明を心がけていたが、一部の調査が未完成であるが、同氏の発表を聞き、これまでの経緯を発表することにした。その例会での発表要旨をもとに、その後判明した若干の資料を加えて、その系譜を記すことにする。

## 一 昔話資料の検討

⑥	⑤	④	③	②	①	〔表1〕「大工と鬼六」の類話一覧表
〔昭39〕 一 九 五 五	〔昭23〕 九 四 八	〔昭11〕 一 九 三 六	〔昭6〕 一 九 三 一	〔昭4〕 一 九 二 九	〔昭3〕 一 九 二 八	〔發行年〕
の成3) 日本昔話集 （第二部		日本昔話名	帖昔話採集手	岩手日報 30)	天邪鬼 (三の巻)	〔書名〕
大工と鬼六	大工と鬼六	大工と鬼六	大工と鬼六	鬼六と大工 ・ 4 10	鬼六と大工	〔話名〕
関 敬吾	柳田 敬吾	柳田 国男	佐々木喜善	織田 秀雄	織田 秀雄	〔編者〕
ら 岩手日報 か	ら 岩手日報 か	ら 岩手日報 か	ら 岩手日報 か	ら 岩手日報 か	天邪鬼の分 語つた話 (岩手県)	〔備考〕

これまで日本において昔話資料として記録された「大工と鬼六」の類話は、最も早い一九二八年（昭3）の「鬼六と大工」から、一九八六年（昭61）の「大工と鬼六」まで十一を数える。それを年代順に並べると、次の通りになる。

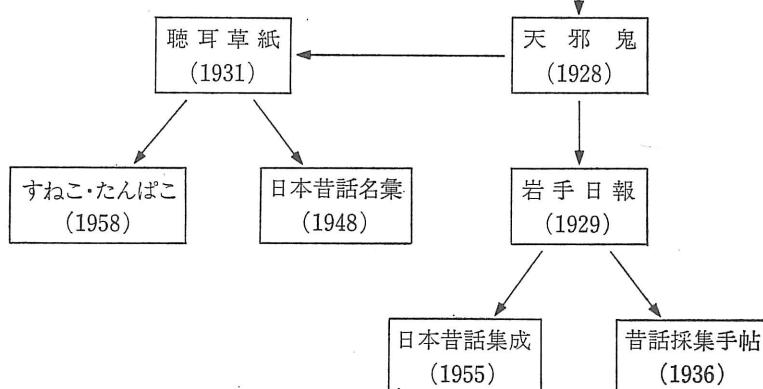
(昭33年版)	(昭33年版)	(昭49年)	(昭51年)	(昭54年)	(昭61年)
すねこ・たんばこ （第一集）	羽前小国昔 （第一集）	佐藤家の大工と鬼六	日本昔話大 （第七卷）	日本昔ばなし （100話）	大工と鬼六
（昭33年版）	（昭33年版）	（昭49年）	（昭51年）	（昭54年）	（昭61年）
平野直 （聴耳草紙）	佐藤義則 （山田リエ）	武田正 （佐藤孝一）	関敬吾 （羽前小国昔 話集から）	六マアと鬼六 （庄屋殿と鬼 六マア）	大工と鬼六 （庄屋殿と鬼 六ばなし）
（聴耳草紙）	（山形県）	（佐藤孝一）	（羽前小国昔 話集から）	（庄屋殿と鬼 六マア）	（庄屋殿と鬼 六ばなし）
（聴耳草紙）	（山形県）	（佐藤孝一）	（羽前小国昔 話集から）	（庄屋殿と鬼 六マア）	（庄屋殿と鬼 六ばなし）
（聴耳草紙）	（山形県）	（佐藤孝一）	（羽前小国昔 話集から）	（庄屋殿と鬼 六マア）	（庄屋殿と鬼 六ばなし）

右の表に見る編者のうち、織田秀雄、佐々木喜善、柳田國男、関敬吾、平野直は、次の図のように原話を採用していることになる。

〈図1〉にみる通り、昔話資料の資料源は『天邪鬼』である。

『天邪鬼』は、岩手県胆沢郡小山村出身の労農運動の推進者、織田秀雄（一九〇八—一九四二）が、一九二七年（昭2）から翌年にかけて発行した個人文芸誌である。二か月に一回の間隔で六号まで発行されたが、「鬼六と大工」は「壯次じいの語つた話」として一九二八年（昭3）二月発行の第三号に、他の七篇の文芸作品とともに掲載された。織田は『天邪鬼』に掲載した「鬼六と大工」を翌年の十月三十日に、土地の方言に改め、『岩手日報』の学芸欄に「胆

右の表に見る編者のうち、織田秀雄、佐々木喜善、柳田國男、関敬吾、平野直は、次の図のように原話を採用していることになる。



（図1）昔話資料にあらわれた「大工と鬼六」

沢郡昔断集」として「瓜子姫の話」とともに寄稿している。

次に『天邪鬼』から『聴耳草紙』への経路を、やや詳しく説明してみよう。

『聴耳草紙』の「大工と鬼六」の話の後に、

胆沢郡金ヶ崎の老婦の話を小山村の織田秀雄氏が聴いて知らせてくれたものの一、昭和三年冬の分

という注がついている。そこから見ると、『聴耳草紙』の出版は一

九三一年（昭6）であるが、織田は『天邪鬼』に執筆した直後に、その原稿を方言に改め、佐々木喜善へ送ったものと思われる。同じ原稿を、翌年『岩手日報』の『胆沢郡昔断集』に入れたのではないか。比べてみると、『岩手日報』の織田の再話の文体が『聴耳草紙』の「大工と鬼六」に酷似しているからである。佐々木は「金ヶ崎の農婦の話」としているが、織田は小学生時代<sup>(1)</sup>を金ヶ崎で過しているので、複数の話者から聞いたのかも知れない。

尚、この『聴耳草紙』に使用された話名「大工と鬼六」が、以後、昔話資料の中で、この話の通称として使用されることになる。

「大工と鬼六」系統の編者のうち、織田を除く他の四人が資料を入手したのは一九二八年（昭3）以後であることが分る。

また、近年の昔話記録のうち、話者が記載されているものは次の三種で、一九七四年から一九八六年に刊行されたものである。

『羽前小国昔話集』 話者 山田リエ 一八九三年（明26）生ま  
れ（資料⑧）

『佐藤家の昔話10』 話者 佐藤孝一 一九二〇年（大9）生ま  
れ（資料⑨）

『日本昔ばなし一〇〇話』 話者 中鉢カヨ 一九三三年（昭8）  
生まれ（資料⑪）

当然、この三人が、いつ、誰から聞いたのかが問題となるが、これらの話者については後に触ることにしたい。

## 二 水田光の翻案について

「大工と鬼六」を述べるあたっては、大正期に彗星のようになに登場した女童話研究家、水田光について説明しなければならない。

水田光（一八八二—一九六四）は熊本県に生まれ、一九〇六年（明39）東京高等師範女子部芸術科卒業後、東京高等師範附属小学校の音楽担当の訓導となつた。水田は訓導としての職務に励む傍ら、義弟（妹の夫）である神話学者、松村武雄（一八八三—一九六九）の薰陶を受け、英語に翻訳されたヨーロッパ各地の児童向けの民間伝承、神話などの文献に親しんでいた。

水田はその後、それらの文献から、民間伝承のいくつかを松村の指導を受けて翻訳し、『幼年世界』『少年世界』などの雑誌に発表するようになった。これらの雑誌は、日本の児童文学の始祖とも言える巖谷小波（一八七〇—一九三三）の編集によるものである。水田が少年雑誌に初登場するのは一九一五年（大4）であり、それ以後、巖谷の求めに応じて外国昔話の翻訳と翻案を続け、童話研究家としての地歩を固めていった。<sup>(2)</sup>

水田が東京高等師範附属小学校に奉職した当時は、口演童話活動が隆盛に向わんとする時期であった。口演童話は一八九六年（明

29) に、巖谷によつて創始され、小学校の講堂、或いは劇場などで催される巖谷の童話の口演の会には、数百人から二千人の聴衆が集まつたといふ。久留島武彦（一八七四—一九六〇）がともに活動するようになつてから、口演童話の人気は全国的に高まり、特に、小学校教師の間に多くの支持者、信奉者を集めていつた。大正期に入ると、久留島の指導を受けた東京高等師範の教師たちを中心とした童話（実演童話ともいつた）の活動が高まり、一九一五年（大正4）には「大塚講話会」が創設された。前記の雑誌への寄稿を通じて、水田と巖谷を結ぶ強い線は容易に推定されるが、さらに、水田と口演童話を結ぶ線はその勤務校の動向から推測することが可能である。

そのような中で、水田は一九一六年（大正5）に『お話の研究』を大日本図書から出版しているが、その内容は「お話とは何ぞや」に始まり、「お話の教育的価値」「お話の取扱い方」を中心としたストーリーテリングの手引書である。<sup>(3)</sup> 同書の冒頭に、著者の言葉で、「父兄及び教職にある人のために『児童のためのお話』を教育的方面から研究し」「理論的研究に力を注ぎ、併せて優秀な『お話』を其例話として巻尾に一縷にして附加」「『お話』は世界各国のものを採りましたが、中には原語其儘ではなくて、私の作意を加へたものもあります。それは『児童のためのお話』として、一層適切にしたいと思つたからであります」<sup>(4)</sup>（傍点筆者）とある。

次いで水田は翌年の一九一七年（大正6）に、『お話の研究』の姉妹篇として『お話の実際』<sup>(5)</sup>を執筆、刊行した。内容は、著者の言葉によると「お話の実際的方面を説くことを主眼とし」「その方面に

ついての智識と材料」「お話の資料を無限ならしめるには、先づお話の何たるかをよく理解して、自由に新作し改作し選択する力を把握する」というものである。同書には新作と改作の実例として、著者の再話による四十一篇の作品が収められている。

水田は翌年から、馬淵冷佑・水田みつ共著『お伽文学』十二巻の刊行に着手している。一九一九年（大正8）に、水田は帝大教授、山崎直方博士と結婚、以後、山崎光子の名で翻訳・執筆を続けた。<sup>(6)</sup> 前出の『お話の実際』には第三章「お話の集成と改作」の章があり、その第三節に「鬼の橋」と題する作品が収録されている。

この「鬼の橋」の概要は次の通りである。

架橋を頼まれた大工が、その難事業に困つてゐると、川の中から鬼が現れ、三日の中に橋をかけてやるうと申し出、大工が喜ぶと、その報酬に眼の玉を要求する。しかし、三度のうちに名前を当てたら眼の玉はとらぬという条件を出す。工事はみるみるうちに進む。三日目の夕方、あてもなく森を歩く大工の耳に女の歌声が聞こえ、その歌により鬼の名が分る。鬼に催促された大工が三度目に「鬼六」の名を言うと、鬼は消える。

「鬼の橋」の作品のあとに著者は解説をつけているが、その中で水田は「この童話には原拠があり」「それは北欧に伝承されているオーラフ上人寺院建築の伝説」であると明記している。その伝説の内容を紹介した後、水田は次のように述べている。

「宗教伝説としてはなかなか面白いのですが、奈何せん、児童の心は、未だ宗教的意識が発達していませんから、この話を全然その儘の形で採り入れるわけにゆきません」

そして、宗教的背景は児童の生活状態や思想情緒と交渉がないので児童の心に合致しないとの理由で「私がオーラフ上人の寺院建立の伝説を改作して『鬼の橋』のような内容に盛り上げた」と記している。

（二）明治期から大正初期にかけての外国文学の翻案に詳しく触れる余裕はないが、坪内逍遙（橋頭三の名を用う）がスコットの『ランマア・ムーアの花嫁』をもとに『春風情話』としたことや、福地櫻痴がユゴーの『レ・ミゼラブル』をもとに『あはれ浮世』として発表し、岡本綺堂はボーの『モルグ街の殺人』からのつくりかえで『半七捕物帳』の中の『半鐘の怪』を著していることは、その一端である。

また、児童向けのものでは、巖谷小波によるグリムからの翻案の「七羽鳥」「紡績姫」が、一八九一年（明24）に『幼年雑誌』に連載されている。それらの翻案に接することにより、水田は「メリヒエン→翻案→児童文学」の方法を、いち早く摂取していたのではないか。外国の文献の翻案についての水田の態度を知るには、前述の『お伽文学』に収録の短篇・中篇の作品がある。それらを見ると、水田の大胆な翻案・改作の様子が分るのである。

ここで取り上げる「鬼の橋」には、随所に口演童話独特の言いまわしが見られる。この作品の背景には巖谷を始めとする口演童話の影響があり、作者が現職の教師であったことは見逃せないところであろう。

### 三 北欧伝説との比較

前章に述べた通り、「鬼の橋」は水田光著『お話の実際』に挿入された一作品であるが、作者の解説により、北欧の巨人であるトルルを日本の鬼に、教会建立を架橋へと翻案・改作したものであることが分る。

（一）で、北欧の伝説をもとに、水田の「鬼の橋」を比較し、さらに本稿の第一章に掲げた織田の「鬼六と大工」を並記し比較してみることにしたい。

北欧に伝わる教会建立伝説は、聖オーラフ（オーラフ王）伝説と聖ラオレンティウス伝説の二種があるが、水田が使用したのは聖オーラフ伝説である。

水田訳のオーラフ伝説をもとに、次の五つの場面に分ける。

Aの部分——発端、主人公の登場、工事の困難。

Bの部分——請負の申し出、報償の要求、名前を当たれば無償。

Cの部分——工事の進捗。

Dの部分——主人公の懊惱、彷徨、子守歌。

Eの部分——名当ての成功、請負者（魔物）の消失。  
このA～Eを次の(1)(2)(3)で比較する。

(1) 北欧の伝承、オーラフ上人寺院建築の伝説——水田光著『お話の実際』三一三一三一五ページ

(2) 鬼の橋——水田光著『お話の実際』三〇五一三一三ページ

(3) 鬼六と大工——佐藤秀昭編『織田秀雄作品集』二四五一一四六

(表2) 北欧の伝承との比較

A	(1) 北 欧 の 伝 承	(2) 鬼 の 橋	(3) 鬼 六 と 大 工
	<p>オーラフ上人は熱烈な基督教の宣伝者であった。彼はノルランドに寺院を建築し、頑強に反抗する異教徒を説服して、教義の宣布に努めやうと思つたが、寺院建立には多大の経費が入用である。しかも彼は之を民衆に負担させるに忍びなかつた。彼は懊惱して森の中を徘徊してゐる。</p>	<p>ある山里に大変流れの早い谷川がありました。その谷川に石の橋がかかるつてゐました。或る時大水が出て、石の橋がすつかりこはれました。村の人達は大変に困つて、大勢で橋を拆へ始めました。けれども何しろ大変流れが早いので、石でも材木でもころくろと流されてしまひます。</p> <p>「困つたね。かう流れが早くては、とてもかなはぬ」と一人の男ががつかりした声で云ひました。</p> <p>「うん、どうも弱るな。こんな風ぢや、何時橋が出来るかわかつたもんぢやない」と他の一人がさも困つたと云ふ顔でこぼしました。</p> <p>仕方がないので、村の人達は川端の草の上に坐り込んで、いろいろ相談をはじめました。すると其の中の一人が、「どうだい、あの源助の奴を引っ張り出しちや、彼奴少しのるまだが、こんな仕事は名人だぜ」</p> <p>と云ひました。他の人達はこれを聞いて、みんなそれがよからうと云つて、橋普請を源助と云ふ男に頼むことにしました。</p> <p>源助と云ふのは、村端に住んでゐる変りものゝ大工であります。仕事が忙しいときには、夜も寝ないで、働くばかりに、少し気に喰はぬことがあると、朝から晩までごろりと寝込んでゐると云ふ風變りでした。</p> <p>橋普請を頼まれますと、源助はすぐ其の日から大勢の人を使</p>	<p>とても流れの速い川がありました。なんば橋をかけても流れてしまう。村の人達も、とんと困り果て、評判のよい大工をたのんで橋をかけることにきめました。</p>

すると一人の巨人が現れて、  
一の条件のもとに或る期間に於  
て寺院を建立してやうと申し  
出た。その条件と云ふのは、所  
定の時間内に建築が落成した  
ら、その報償として、日と月と  
を貰ひ受けるか、若しくは上人  
自身の体を貰ひたい。もしまだ  
同期間に巨人の名を云ひ当てた  
ら、報酬は入らぬと云ふのであ  
った。

或る朝源助は川の端に突立つて、水の面を眺めながらぼんやりしてゐました。すると石の間から突然に黒い煙がむくくと湧いて来ました。そしてそれが一所にかたまつて大きな円いものになつたと思ふと、どうやらそれに眼や口が出来るやうです。『おや／＼』と思つてゐるうちに、黒い烟に手が生え足が生えて、大きな鬼になりました。

それを見ますと源助は、顔が真蒼になつて、がた／＼と顛へだしました。鬼はさも可笑しそうな顔をして、前を助けに来ただんだよ。どうだい今から三日のうちに、乃公が橋をかけてやらうか」と云ひました。

「えゝ、あなたが、橋をかけてくれるんですか。そいつは有り難い」

「おい／＼あまり喜んだやいけない。たゞで橋をかけてやるんぢやないよ」と云ひました。  
「そりやたゞではないでせう。御礼にはお金をどつさり上げますさ」

その大工はうんと上手で、すぐとよいと返事をしたが、心配なので、川の淵さ、つつこぼして、流れる水を見ていたら、水の泡からブックリと大きな鬼が出来ました。そして「大工さん何考へている」と言つたから大工が「橋をかけねばならぬ」と言つたれば、鬼が「お前の目玉よこしたら橋をかけてくれる」と言いました。

「お金なんか要らないよ」

「ぢや、何が欲しいんです。」

「お前の眼の玉だよ」

「ええ、私の眼の玉が欲しいんですつて」

と、源助は思はず大きな声を出して、鬼の顔を見上げました。

「さうだよ。だが、までよ。かはいさうだから、橋が出来上がる迄に、乃公の名をあてたら、眼の玉も取らないことにしよう。どうだい源公」

と、鬼は源助を見下して、にやり／＼と笑つてゐます。源助は暫らくの間じつと考え込みました。

「どうも眼玉をとられちや大変だ。と云つて鬼にでも頼まなくちや、橋が出来上りそうにもない。橋が出来ぬとなりや、乃公の一生の名折だ。よし眼玉なんか構ふものか、頼んでしまへ。それに鬼の名を当てるると眼玉も許してくれる」と云ふんだから……だが待てよ、一度で彼奴の名を当てることは少しむづかしいぞ」

と、かう思つて、

「一度あなたの名を当てるんですか」

と、聞きました。

「一度で当てるのさ」

と鬼が答へました。

「それぢやあまりひどいんです」

「ぢや二度にしよう」

「三度目の正直と云ふことがあるから、三度にして下さい」

「なか／＼欲張つてゐな。よし／＼承知してやらう」

と、鬼が云ひましたので、源助はどう／＼橋普請を鬼に頼んで

D	C	
<p>これを見た上人は非常に苦悶した。日と月とを与ふることは、もとより不可能である。それかと云つて、自分の体を巨人の手に委したら、教義の宣伝は水泡に帰せねばならぬ。懊惱の極彼はまた森の奥にわけ入つた。そして沈吟苦慮しながら、重い足を動かしていると、何処からとなく、幼児の泣声が聞える。続いて母らしいものの声で、黙れ、黙れ、いとし児よ、明日は父なる『暴風雨』の君が、うまし土産を持ちかへる、月かや日かや、上人か。と歌ふのが耳に入る。上人は欣舞して喜んだ。</p>	<p>上人はたやすく之に応じた。すると驚くべし、工事は着々として進捗し、約束の期間を余す一日と云ふときには、頂上の尖閣が完成しないばかりとなつた。</p>	<p>しまひました。</p>
<p>泣くなよ泣くな、ねんねしな 「明日はよい日だ、お父さんが、かはいい土産は何だらう、かはいい土産は何だらう」</p>	<p>源助は、三日が間どうかして鬼の名を聞き出したいと焦り立てましたが、すつかり駄目でありました。それ故三日目の夕方になると、大変心配になつて来ました。 「いよ／＼明日の朝になつたぞ。三度のうちでうまく彼奴の名を当てればよいが、そうでないと一生の盲目になつてしまなきやならない」</p> <p>源助はかう思ふと、もう立つても居てもゐられぬやうになつて来ましたので、いきなり家を飛び出して、そこらあたりをあてどもなくぐる／＼と歩き廻りました。余り考へ込んでゐたので、川上の森のそばまでやつて來たことにも気がつきませんでした。するとと森の中に女の声がして、「泣くなよ泣くな、ねんねしな、鬼六さんの子は強い。」</p>	<p>するとどうでせう。昼間は鬼は影も形も見えませんでしたが、夜が明けて見ると、ちゃんと土台石が並べてありました。その次の夜が明けると、土台石の上に柱がたてゝありました。も一つ夜が明けたら橋は立派に出来上るにちがひありません。</p> <p>するとどうでせう。昼間は鬼は影も形も見えませんでしたが、夜が明けて見ると、ちゃんと土台石が並べてありました。その次の夜が明けると、土台石の上に柱がたてゝありました。も一つ夜が明けたら橋は立派に出来上るにちがひありません。</p>

そして急いで建築場にかけつけ見ると、巨人はまさに尖閣を造り終えようとしてゐた。上人はすかさず大きな声で「お前の名は暴風雨だ」と叫ぶと、巨人は高い／＼寺院の屋根から転げ落ちて、五体が微塵に砕けてしまつた。その碎片の一つ一つが今日の燧石だと云ふのである。

「違ひよ」と得意そうに云ひました。源助は、「ぢや鬼太郎でせう」と、また違った名を云ひました。鬼はいよいよ得意になつて、「それも違つた。今一つだよ。今度違つたらいいよ」と云つた。

と、歌つてゐました。  
これを聞くと、源助は躍り上つて喜びました。  
「しめたぞ。彼奴の名は鬼六と云ふんだな。それさへわかれば、もう大丈夫だ。明日は一つ彼奴をびつくりさしてやるぞ」と、かう云つて、源助は大元氣で帰つて来ました。そして夜の明けるのを今か／＼と待ちかねてゐました。

夜が明けると、源助は大急ぎで川の端にやつて來ました。するともう橋はちやんと出来上つて、鬼が其の上に突立つて、さも得意そうにやり／＼笑つてゐました。鬼は源助を見るなり、大きな声で、

「見る源助。約束の橋は出来上つたぞ。どうだい乃公の名はわかつたかい。わからなければ、かはいさうだが眼の玉を貰つてしまふよ」

と云ひました。源助は名をあてる前に此奴をからかつてやらうと思ひました。それ故わざと弱りきつたやうな顔をして、「なか／＼わかりませんね。一つ当てゝ見ませうか。お前さんの名は鬼平でせう」

と、わざと違つた名を云ひました。すると鬼はげら／＼と笑つて、

次の日、又鬼に逢いました。鬼は「早く、目玉よこせ。もしも、俺の名前を、あてたら目玉よこさなくともよい」と言いました。大工は、よしと言ひながら「何それ」と言つたれば鬼は「そうでもない」と「何それ」と云ひました。「そうでもない」一番、後から大工は大好きな声で「鬼六！」。そうしたれば、その鬼は、ボッカリ消えましたとさ。

と云ひながら、今にも擱みかゝりそな手つきをして、だんぐり、源助の方に近寄つて来ました。源助は二足三足とびすさるなり、大きな声で、

「何をするんだい、鬼六の野郎」

とどなりました。すると鬼はびっくりして、

「しまつた。乃公の名を知つてた」

と云つたかと思ふと、忽ち姿は消えて見えなくなりました。

右の表により、(1)(2)(3)の共通項および日本の風俗に合致させるための改変による事物の置き換え、あるいは相違点を要約すると、次の通りである。

〈主人公〉 聖オーラフ→大工 (源助) →大工

〈建造物〉 教会→橋→橋

〈援助者〉 巨人→鬼→鬼

〈請負の期間〉 所定の時間→三日のうち→ (なし)

〈要求〉 日と月もしくは上人の体、名当て→眼玉、名当て→目玉

〈彷徨〉 懲恼の極、森の奥へ→そこらあたりをあてどもなく、川

上の森に→あてなく山さ逃げ、プラプラ歩いて

〈歌声〉 母らしいものの声→女の声→ (なし)

〈子守歌〉 (表2を参照、全文を比較)

〈名前〉『暴風雨』の君 (Winter und Wetter)<sup>(8)</sup>→鬼六→鬼六

〈消失〉 屋根から転げ落ち、五体が微塵に碎ける→忽ち姿は消え  
る→ボッカリ消える

「鬼の橋」の解説中に水田は鬼の出現について、

「オーラフ上人の原話では、巨人は突然その姿を現はすのであります。が、『鬼の橋』では、出現の場面に童話的雰囲気を与へるため、石の間から湧き出した煙が、次第に凝り固つて鬼の姿をなすと云ふことにしました。これは私の創意になつた契機ではありません。ちゃんと粉本が存してゐます。亞刺比亞夜話に於ける漁夫と海底の壺の物語や、英吉利の一童話『トムと怪物の壺』などが、即ちこれであります」

と述べている。

また代償の要求に対しても、水田は次のように記している。

「原話では、寺院建立の報償として、日月若しくはオーラフ上人自身を要求してゐますが、『鬼の橋』に於ては、これを源助の眼球に変改しました。オーラフ上人のような高僧、一種の神通力を持つていたと信ぜられている高僧に対しては、日や月を要求しても、さして奇怪にも思はれませんが、ただ一介の田舎大工にかう云ふ要求を持ち出すと云ふのは、甚だ不似合であります。また巨人程の巨幹ではない鬼の子供への土産としては、

人間の体全部よりは、眼の球の方が玩具じみて面白いと思ひましたから、上述の如き変改を試みたのであります」<sup>(9)</sup>  
水田が北欧の伝承を自作の童話に取り入れたことについては、松村武雄の童話研究の影響が大きいが詳細は他にゆずる。また、「大工と鬼六」関係の資料にみられる「語り口」の比較検討も、紙面の都合で他にゆずることとする。

#### 四 「大工と鬼六」の系譜

ところで前出の松村武雄について、あと少しの補足説明を行いたい。

松村武雄は一九一〇年（明43）に東京帝国大学英文科を卒業後、神話の研究のため大学院への進学を希望するが、英文科卒業であるために教授会から難色を示され、それに対し松村は研究題目を「英文学に現れたる神話の研究」として希望を果す。一九二一年に「古代希臘の文化に現れたる神々の宗教的葛藤の研究」をもつて文学博士の学位を取得している。一九二三年のヨーロッパ留学では神話学の研究に努め、その成果は一九二九年の『神話学論考』、一九四〇～四一年の『神話学原論』（上、下）等に収められている。

しかしそれより前に、松村は早くからヨーロッパのフォークロアやフォークテールズ等の「童話学」の研究を重ねており、一九一〇～二一年に森鷗外らとともに『標準お伽文庫』全五巻を編纂、刊行している。「児童に文学や伝承の物語を与える教育」として、松村が英文学を中心とした家庭向き及び児童向きの外国の文献や民間伝承を研究、紹介していたことは、後に、一九二四年（大13）から一

九二七年（昭2）にかけて刊行された『世界童話大系』全二十三巻によって見ることができる。その内容や規模が松村の童話研究によつてもたらわれたものである」とや、同時期に松村の著書『童話及び児童の研究』『童話教育新論』等が「子どものための文学や昔話の教育」即ち当時の「童話教育」に大きな貢献を果したことについて、現在までに詳しく述べられたものは殆どなく、しかも語り研究の関係者にはあまり知られていない。<sup>(12)</sup>

松村はあくまで神話学を第一義の一生の仕事として貫いたので、童話教育の実現には義姉にあたる水田に期待するところが大きかった。いよいよ、松村と水田が常に同じ資料を用い、共働で童話の翻訳と研究を重ねていた理由を見るのである。

松村の所蔵していた外国の文献は戦災に会って一物も残っていないが、その数は膨大で、手当り次第にとり寄せたとのことである。松村はその一端を『児童及び童話の研究』の第九章第四節の「童話の選択に関する原則及び方法論」に、「材料供給の本原地としての歐米の書籍」として九十七冊を掲げている。

さて、本論に関係のある北欧の神話については、松村は『世界神話伝説大系29、北欧の神話伝説I』（一九一七年）に、十四冊の参考文献を掲げているが、そのうちの

B. Thorpe, Northern Mythology.

W. A. Craigie, Scandinavian Folk-lore.

は、いずれにも名当てと身体あるいは目玉の要求のモチーフのある教会建立伝説が含まれている。<sup>(13)</sup> さらに、一九二九年の『神話学論

考』には「北欧神話の基督教化」の一節があり、そこに聖オーラフの寺院建築の伝説が挙げられ、その概要が記されている。同書の注により、その典拠は、

L. Uhland, *Der Mythus von Thor*, pp. 111, 112.  
やあねいふが知られる。

これに掲出した四冊が、松村と水田の使用した北欧伝説の原籍であり、「鬼の橋」に改作した伝説のテキストはこの中にある筈である。そのうち『神話学論考』に所収の L. Uhland からの松村の訳の文脈が、「鬼の橋」の解説に附された水田訳の「北欧の教会建立伝説」と、ほぼ同一である。そこから、この文献が本論の「鬼の橋」の原典に当ると推察できよう。

水田が松村の指導を受けて、北欧の教会建立伝説を、童話教育の立場から「鬼の橋」として改作したことはすでに記した。その「鬼の橋」と「大工と鬼」の共通項と、昔話資料として現れた時期についても、すでに述べた通りである。あとは、何故、岩手県から昔話としての最初の資料が出たのだろうかということである。それが検証できれば、日本の昔話へ混入した経過が明らかになる。

昔話資料の上で「大工と鬼六」の系譜は、すでに述べたように『天邪鬼』が発端となっている。問題は、水田が「鬼の橋」を発表した一九一七年（大6）から、織田秀雄が『天邪鬼』に「鬼六と大工」を収録した一九二八（昭3）までの十一年間にある。「鬼の橋」の成立においては外国のある書物をもとに、日本の風俗に合致させるための翻案（変改）が行われたと明確に記されてい る。十一年後の「鬼六と大工」では、「壯次じいの語った話」とし

て、口伝えのものを記録したという形をとっている。その間の最大の鍵を握るのは「鬼六」という名前である。名前が同じであり、その上、名当ての状況が酷似している点を解明しなければならない。その点で、『民間伝承と児童文学の口演を一体化した活動』としての、明治・大正・昭和初期の「口演童話活動」に注目をする必要があるだろう。

口演童話の活動は明治期に巖谷小波によって始められ、まもなく全国にくまなく拡がり、多くの小学校教師をその運動に巻き込んでいったことは前に述べた。大正期には数百名を越す「童話の専門家」が輩出し、童話家の指導による教師・保育者の組織する数多くの童話団体が誕生した。それらの団体では、休暇中にチームを組んで各地の小学校などで「童話口演会」を開く巡業の旅をしたということである。一方、童話の大師といわれた巖谷は、単独で、或いは久留島（前出）とともに、やはり精力的に全国各地へ口演の行脚を続け、時には一日数か所の会場で演じたという。その巖谷の自伝『我が五十年』には「久留島君が世界漫遊の途についた留守中には、私が主になつて、或いは仙台に、又は山形などという地方へ出かけた」という個所がある。

そのような童話口演の会が開かれる時、会場に集まつたのは小学校の児童ばかりでなく、農村の婦人たちも多く参加した。女学校のある市や町では、女学生のための会が盛んに開かれ、また大都市では一般成人向けの会も公会堂や劇場で盛大に開かれた。このように口演童話が大衆娯楽であった記録がおびただしく残されている。そし て、口演童話から口承である一般的の語りへの結びつきを推測する

これが可能であり、鬼六の名はこうして口演童話によって運ばれたのである。

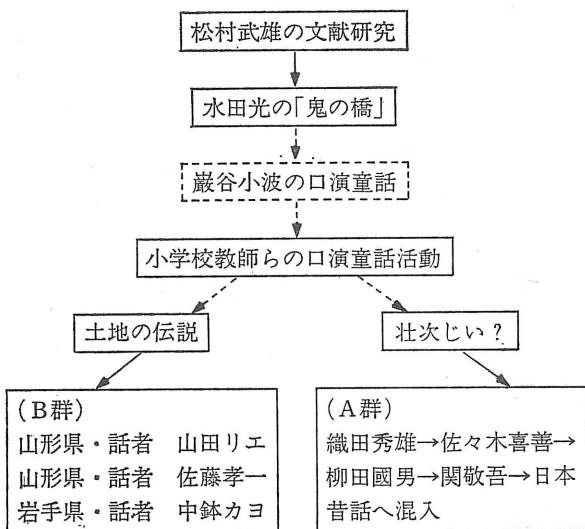
この一般的な状況をふまえて、私は水田の一冊の研究書『お話の研究』と『お話の実際』の影響を考えたいと思うのである。この二冊の著書は、口演童話家の手引書として版を重ねた。前記の語りの一般状況は、水田の著書の人気とともに「鬼六の話」の流布に大きな影響を及ぼしたことであろう。しかし、水田の多くの翻案の作品が文学的価値を永く保持できなかつた事由があり、それは口演童話そのものが、戦後、世に忘れられていった事情と別物ではない。水田の業績が昭和初期を境に世に埋れた事情も、あまり人に知られていない。<sup>(16)</sup> 当時の口演童話活動、ながんずくその翻案と改作の問題には限界があり、功罪相半ばの感を禁じ得ない。

さて、「鬼六の話」を口伝えで受け継いだ前出の三人の話者（資料⑧⑨⑪）は、口承に変つた段階で、それぞれの土地の川や橋にまつわる伝説として聞いたか、或いは、それを聞いた人からの伝聞とみてよいのではないだろうか。

その時期、口演童話の活動は東北地方へしきりと足を伸ばしているが、どういう訳か岩手県内に在住した童話家の活動は記録に残っていない。<sup>(17)</sup> そのために、逆にまわりの県から岩手県へと伝聞で広まつた可能性を思われるるのである。特に、口演童話と昔話の関係は今まで多くを論じられていないし、その他の要因も考えてみなければならない。

ここまで経過は推定であるが、口承としてそれぞれの土地に入つた「鬼六の話」は、それぞれの土地の川や橋にまつわる伝説と結

びついて受容された、と見ることができるのでないだろうか。これを図で示すと次のようになる。



(図2) 「大工と鬼六」の系譜

従つて、繰り返しになるが、「大工と鬼六」の話は、松村の文献研究に始まり、水田の翻案・改作を経て、口演童話などにより各地に運ばれ、土地の川や橋にまつわる伝説と結びつき、さらに一般化され、日本の昔話として受容された、と見られるのである。おそらくは、このような「大工と鬼六」と同様の経過をたどった昔話は、他にもあるのではないだろうか。以上は「外国種子の書承が日本の風俗にとけ込み口承となつた変遷の道」をたどる私の試論である。

〔注〕

- (1) 佐藤秀昭『人間織田秀雄——土の唄』(一九八〇、青磁社)  
(2) 拙稿『民話の手帖33号』(一九八七、国土社)一〇八一  
一五頁「大工と鬼六」の周辺に、水田と少年少女雑誌との関係について触れた。  
(3) 水田光『お話の研究』(一九一六、大日本図書。復刻版、一九八七、久山社)。戦後、ストーリー・テリングの手引書として同書を初紹介したのは、瀬田貞一『落穂拾い、下巻』(一九八二、福音館)であった。  
(4) 前掲『お話の研究』一一一頁。  
(5) 水田光『お話の実際』(一九一七、大日本図書)  
(6) 滑川道夫他『復刻叢書日本の児童文学理論別巻』(一九八七、久山社)所収、拙稿「お話の研究—解説」に詳しく触れた。  
(7) 前掲『お話の実際』三一五頁。  
(8) 松村武雄『神話学論考』(一九二九、同文館)四一五頁、による。

(9) 前掲『お話の実際』三一六頁

(10) 松村武雄『児童及び童話の研究』(一九二二、培風館)

(11) 松村武雄『童話教育新論』(一九二九、培風館)

(12) 松村が使用する「童話」の語は、創作の文学と民間伝承の多くを含み、児童に適切な読物を広く指している。松村の童話研究と水田の著作との関係は、拙稿(前掲)「『大工と鬼六』の周辺」で述べた。

(13) このうち『Northern Mythology』は、『お話の研究』一三六頁にも参考文献として掲げられている。

(14) 「Der Mythus von Thor」は、研究例会での発表の後に、東京大学の大林太良教授から教示いただいた。

(15) 巖谷小波『我が五十年』(一九二〇、東亜堂。復刻版、一九八七、久山社)  
(16) その事情と、口演童話の語り口と文学的価値については、拙稿(前掲)「お話の研究—解説」に詳述した。

(17) 内山憲尚編『日本口演童話史』(一九七二、博文社)による。

〔補注〕

第十一回研究例会での発表の後に、次の「大工と鬼六」の資料が出ていた。

- 『紫波の民話』(小平民話の会編、国土社、一九八七年)中鉢力ヨの語り「大工と鬼六」資料⑩と同じ。  
『橋を架ける鬼』(立石憲利編著、崇文社、一九八八年)賀島飛左の語り「橋を架ける鬼」  
(さくらい・みき／語り手たちの会)